

の問題に就て物質的或は精神的に煩悶し若痛を感じつゝ、ある現今の状態なり、且く物質問題は扱て置き精神の苦痛は宗教を離れて他に苦痛を免る、道なきを知り佛の教に従ひ何物乎を得んと切望して止まざるなり、其の切望たるや譬ば幼兒の空腹を感じ苦み泣ける兒に我慢をせよ明日ならば馳走すると云ふ親の言葉を以て子供は満足するや否決して満足せざるなり、之を一般社會の人間は現在生活に迂遠の事より眼前の生活に關係を有する問題明日と云はず今日の問題を解決し吾々に一大安心を興へられん事を欲求して止まざる今日なり、故に末法應時の教法即ち日蓮聖人の百般の方面に於ける御教に従ひ社會人類を救済し聖祖の御理想たる一天四海皆歸妙法の實現に勵まざるべからず、其の實現たるや實に本化門下教徒の努力に俟つものなれば身心を法華經に奉獻し、布教傳道に精勵し以て益々宗風の宣揚を期せん事を希望して止まざる耳。

● 日蓮主義とは何ぞ

一、日蓮主義讚仰の氣運

辻 能 學

近頃宗祖日蓮上人の人格及び理想が一般の學者青年並びに上流中流の有識階級の人々の間に渴仰讚仰せられつゝ、ある事は寔に異常の趨勢を爲してゐる。

其事實的證跡として見らるべき現象は國柱會、天晴會法華會等の如き上流人士を中堅とせる會合或は帝國大學以下各専門學校の吾が日蓮上人鑽仰研究の會合は數十を以て數へられ又諸新聞諸雜誌に及ぶ迄で聖人の史活又は小説講談の類を掲載しないものはないと云ふ宗教上未曾有の日蓮主義鑽仰の時代は來つたのである斯る氣運を促成したに就ては種々の原因に依ると雖も根本的に云へば世界を通じての現代の趨勢と個人的生存の必要と國家の運命とが必然的に促して聖人の如き徹底せる大人格深宏なる大理想に不知不識の間に其の標的

を見出して期せずして一般の人が此れに集り來た

つたのであつて即ち末法の^〇大導師^〇たるに由るので

ある。現代は實に切迫せる時代である人智の發達

と人類の繁殖と交通の至便とは世界を日に月に狹

ばめつ、ある、善く云へば世界は渾一的状態を爲

しつ、來つて居る夫れと共に人と人と家と家國と

國民族と民族人種と人種との間に於ける生存競争

が時々刻々激しくなり益々切迫し來たつたのであ

る此間に處して世界的權威を持つる宗教と道徳が

實際に於て無のであるから人心は自然に頽廢し

日に日に危險なる状態になりつ、ある科學の發達

は中世紀時代に教へて呉れた天國や極樂と云ふ美

しい夢—偶像を破壊して醜き自然の現實を我等

の前に開展した、世界は今理想なき現實の慾望を

充さしめ様ともがいて居る日蓮上人の聖語を以て

云へば、鬪争堅固白法隱沒 時代で即ち廿世紀の

趨勢たる民本主義と軍國主義二大潮流の調和を計

る大主義大人格を求めてゐるのであるこれ現代に

於てこの兩主義を完全に調和したる日蓮主義の氣

運を作りし所以である。

二、日蓮聖人の靈的大人格

日蓮上人は實に統一されたる多方面の大人格者

である即ち「大難四ヶ度小難限りなし」と云ふ大

迫害に處して御自分の主義を貫徹されてゐる其意

志の強固なる事須彌山の如しと云ふが如き半面に

「日蓮は泣かねども涙ひまなし」と云ふ大慈悲心

を以て居られた聖人は智情意の三を圓滿に具足し

之を積極的に徹底されたお方である山川智應居士

は聖人の人格の偉なる点を十ヶ條に歸して居る即

ち「思想の深刻」「抱負の雄大」「實行の徹底」「理想

の永遠」「報恩の徳操」「同情の博大」「義分の尊重」

「思想の周密」「凡身の謙遜」と云ふのである斯る多

方面の人格も所詮聖人自らも矢張り眞理正法に努

力奮闘の超絶的精神を發揮した「法華經の行者」

として又日本國と法華經との本縁的關係を明にし

日本が將來の世界に對する靈的大任務を闡明して

國家國民の眼を開かしむとする「日本の柱」「日本

人の師父」として任じられてゐる事は「開目鈔」
「撰時鈔」等の聖典に於て明である、如是個人と
しても國民としても又世界的に考へても偉大明確
なる抱負宣言を發し得た人は吾が宗祖上人の外に
未だ其類例を見ないのである單にその宣言すらこ
れ程完備して出来ない況んや夫れに適應した思想
内容が整然として具備して居るのであるから現代
の吾が同胞が國聖日蓮聖人の御前に合掌禮拜を爲
しても譽れでこそあれ決して恥すべき事ではない
のである。

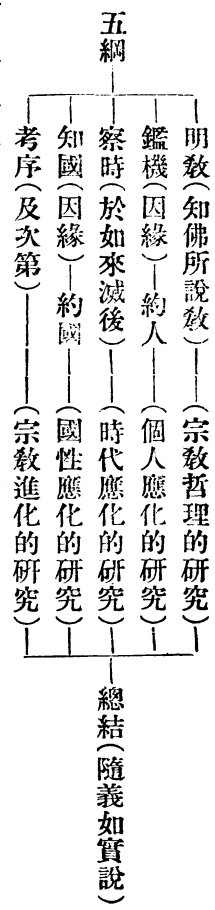
三、現今の日蓮宗に就て

今日の吾が日蓮宗は（各派綜合上よりの談であ
る）寧ろ聖人の眞意を離れた宗であると吾人は敢
えて云いたい吾聖人の宗教は今日の日蓮宗を産出
した宗教ではない、聖人開宗宣言の眞意義は決し
て今日の如き分派のものではなくて一大教團を
唯一最尊無上の慈教也と斷定し宣言せられたの

である現今吾宗門内には八教團に分れてゐるが此
等各派は皆聖人を直接に認めたものではなく其派
祖を通じて間接に認めてゐるのである。のみなら
ず根本に於て偏見を以つてし其聖者に反するが如
き教判なきにしも非ずである上行再誕遊ばしてよ
り既に七百年の慶事を迎へ奉る吾等宗門僧侶は先
づ第一に統一的八大教團を企圖し斷行せねば宗祖
に對して申譯けがないではないか此の世界的一大
祝典を卜し吾日蓮宗當局者は須く分裂的教團をし
て一大日蓮たらしめむ事に盡力して貰ひ度いので
ある。

四、日蓮聖人と五綱三秘

宗祖聖人の理想信念は其宗教の内容たる三秘五
綱とに顯はれてゐる五綱とは聖人が其宗旨たる三
大秘法を建設するに至つた所以を闡明する五方面
の意義を示したものである今其大要を圖示すれ左
の如くである。



此の五綱教判詮攻の結果本化妙宗を世界統一最題目の五字七字也即ち法華經本門壽量品の肝心た後の宗教と定めたので佛教各宗に於ても全く比類する準備として宗教の最勝教理と其對象(實行方面)たる個人と國家との因縁關係と此兩者を懸合はした宗教弘通の進化的法則とを研究することである更に三大秘法とは五綱判教に依て選出せられたる宗旨にして本因本果種脱一雙の一大秘法たる

圖掲せば即ち



である日蓮聖人自ら其三大秘法を叙して云はれた

「一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし所謂寶塔の中の釋迦多寶以外

の諸佛並に上行等の四菩薩脇士となるべし二には本門の戒壇三には日本乃至漢土月氏一閻浮提の人ごとに有智無智をさらはず一同に他事を捨

て南無妙法蓮華經と唱ふべし」(報恩抄 遠一五)

九)と

即ち「本門の題目」は本門の事觀として現實を深刻に徹底せる大哲學、本科學の根柢を吾等に與へ、「本門の戒壇」は最も自然的にして豊富なる大道徳の根柢と國家其のものを理想化する大事業の力を與へ、「本門の本尊」は本佛の一念三千として其法界の全体を眞善美の且象體なりとする本佛の大創作觀と大宗教哲學觀を吾等に與へて根柢より解脱せしめる日蓮主義の抱負と内容とは實に世界を救ふべき大宗教たると同時に大哲學、大道德、大事業を産み出すべき根本力たるに充分である終りに臨むで左に五綱三秘の二大要点を示す。

宗教五綱——(本化教相門)

宗旨三秘——(本化觀心門)——宗門八箇大事
(宗乘の二大綱領)

五、法華經の理想

法華經は宗教。哲學の根元であり、飯着であり、融合であつて此經の大斷以外に出づる宗教。哲學あ

ることなく此明鏡に照して見えざる「微」も亦ある事なく久遠を貫き三世を通した究竟の大真理である以上世界の文化は同じく此大綱の下に一括され飯納され而して開顯されなければならない。

「諸の説く法は其義趣に隨ひて皆實相と違背せず若くは俗間の經書治世の瞿言資生の業等と皆正法に須はむ」と。

「諸所說法」とは宗教。哲學科學文藝の思想である「俗間經書」とは世間一般の道德書である「治世語言」とは政治法律である「資生業」とは實業である「不相違背」「皆須正法」はこれ等一切の文化互に矛盾することなく各々其根本より蘇生復活して眞實融妙の發達を爲すべきを明せるのである。

「此法門出現せば正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出でて後の星の光、巧匠の後に拙を知るなるべし此時には正像の寺塔の佛像僧等の靈驗は皆消え失せて但だ此の大法のみ一閻浮提に流布すべしと見えて候各々はかゝる法門に契

りある人なればたのもしとおぼすべし」(三澤抄) 遺一七〇六

鬪諍堅固の警鐘は徒り歐洲大陸のみならず今や全世界の空に大に鳴つてゐる日本國民たる者は須く長夜の眠りから醒めねばならない、而して國體開顯の聖者吾祖日蓮大聖人の一大理想(法華經の理想也)である大教團組織の曉に當つて徹底的に一切人類をして妙法醍醐に等しく潤ははし常寂光土の思あらしめなければならぬ此れが吾々日蓮門下として聖誕七百年紀念事業の第一歩であり又吾々一生を通じての感應生活であり又報恩生活であるのである。

以 上

善日鷹の使命

志 村 皓 堂

貞應元年の二月十六日は善日鷹が誕生の日であつた。父の重忠と母の梅菊とが共に喜ぶそのなかにも、此の鷹が尊くも上行菩薩の御再誕として、

末法の暗を除いて、民族の文化を積極的に保護し新しい生命の道を照し出す、救ひの主であらうとは、よもや思はなかつたことであらう。當時に於て氣付かぬのは無理もない。冷暖を経ること七百、我が帝國は建國以來未曾有の文明を來たし、世界の悉くが羨みと怖れとを以て見るやうになつた今日、安房小湊の浦に生れました、善日鷹即ち日蓮聖人が如何なる使命のもとに、降誕あらせられたかと心付く人が、果して幾人あるであらうか？

一体世人の多くは、時に不出世の大偉人でも現はれると、之れに對して直ちに神秘的に解釋して了つて、何の爲めに偉いのか、何の爲きに尊いのか、而して何等の使命を齎したのであるかを考案もしないで、唯だ有り難いから信する、御利益があるから祈るといふのみで、此の偉人に對して何等研究的態度に出でないのか、大多數のやうに見受けられる。これが爲めに往々にして此の大偉人を過まり、飛んでもない曲解をしたり、あられない侮蔑的態度に出たり、または迷信に陥つた